

# 「静かに思ひて嗟<sup>なげ</sup>くに堪へたり」

——『源氏物語』 柏木巻の白詩引用論再検討——

岸 ひとみ

〔要旨〕『源氏物語』 柏木巻において、光源氏が初めて不義の子を抱いて口ずさむ「静かに思ひて嗟くに堪へたり」は、『白氏文集』「自嘲」の一節を引用しており、従来から、子に対する

源氏の胸中心理として捉えられてきた。本稿においては、この朗詠部分に焦点をあて、源氏はなぜ「喜ぶに堪へ」を略したのか、それが物語の展開においてどのような意義を持つのかを再検討した。

その結果、これは女三の宮に向けたもので、源氏が女三の宮への未練から、不義の子を持つ父の嘆きを訴えたことが判明した。そこから、朗詠が単なる朗詠にとどまらず、源氏から女三の宮へのメッセージとしての役割を担い、その後に続く会話に結びつくものとなった。

朗詠という手法を用いることで、『白氏文集』の世界が『源

氏物語』において単なる引用以上に機能し、源氏の韜晦された心情をあぶり出し、原詩とは異なる物語の深い世界を構築していることを浮き彫りにした。

〔キーワード〕源氏物語、自嘲、静かに思ひて嗟くに堪へたり

はじめに

『源氏物語』 柏木巻において、光源氏が初めて不義の子を抱いて口ずさむ「静かに思ひて嗟くに堪へたり」は、『白氏文集』「自嘲」の一節を引用している<sup>(1)</sup>。この解釈については、古注を含む注釈書では、子に対する源氏の胸中心理として捉えており、柏木の子であるがゆえに、原詩の「喜ぶに堪へ」を略し

て、嘆かわしく思うとするのが主流である<sup>(2)</sup>。

先行研究を確認すると、松田成穂氏は「静かに思ひて歎くに堪へたり」と誦するとき、原詩篇のもっている慶祝的気分はすべて切り捨てられているように見える<sup>(3)</sup>として、この引用は「五十八翁樂天のわが子に対する関係が、源氏と薫との関係に置き換えられてのものであった。そしてここでは源氏自身の感想として述べられている」とされ<sup>(3)</sup>、深沢三千男氏は『湖月抄』師説に「よるこぶにたへたりといふをば略してなげくにたへたりと云るは、源氏の御心にかほるの生給へるをなげかしくのみおぼす故也」と言うように、断章転義によって深い含意をたらずのは、例の作者の癖であろうが、「十とりすてたる」と言つてまで「五十八」という数字にこだわっているのは、それだけ白樂天の「自嘲」詩の引用にこだわっている事でもあるが、それはこの場合特に「汝が父に〔爺にと同じ〕」と、言いたかったからにほかならないだろう<sup>(4)</sup>と論じられている<sup>(4)</sup>。

このように従来の研究史においては、「自嘲」の詩の世界を一部取り出して、白樂天が詩に込めた我が子に対する思いを、源氏の薫への思いとしてスライドし、原詩の喜びを削った点を踏まえて、源氏の心情として「静かに思ひて嗟くに堪へたり」

を捉えている。白詩の引用であることから、子に対する気持ちを朗詠しているとして、主眼は「汝が爺に」の部分であり、「静かに思ひて嗟くに堪へたり」はその解釈を導き出すためのものとも見受けられる<sup>(5)</sup>。

しかし、「汝が爺に」の箇所は草子地で、源氏が直接口にしたのは「静かに思ひて嗟くに堪へたり」である。まずはこの部分が意味するものを押えるべきであろう。これは心内文でも、独り言でもなく、誦している。「誦する」ということは、節をつけて吟じられるもので、周りに聞こえるほどの音量があり、何気なく口から出たものではない。何らかの明確な意図をもって、周りにいる者に聞かせるということであろう。周りにいる者とは、乳母、女房、女三の宮、薫であるが、意味を理解できない赤子の薫に向つて朗詠したものとするのは、無理がある<sup>(6)</sup>。薫に対する源氏の胸中心理と解するにとどまるのは、原詩に囚われており、むしろ、その思いを誰かに聞かせたいという意図をもつて吟じているのではないだろうか。

原詩と比較すると、『源氏物語』においては、単に我が子ではないという違いがあるだけでなく、「うち誦じ」ということからそれを聞く者の存在があることを忘れてはならない。なぜ

源氏がわざわざ「喜ぶに堪へ」を略して「うち誦じ」たのか<sup>(7)</sup>。この真意をわかりうるのは、源氏が、薫は我が子ではないという事実を掴んでいることまで知っている者だけである。たとえ密通があつたことを知っていても、源氏がそれを知らないと思つている者には、この朗詠の「喜ぶに堪へ」を略した真意はわからない。

該当部分は、次のとおりである。

あはれ、はかなかりける人の契りかなと見たまふに、おほかたの世の定めなさも思しつづけられて、涙のほろほろとこぼれぬるを、今日は事忌すべき日とおし拭ひ隠したまふ。「静かに思ひて嗟くに堪へたり」とうち誦じたまふ。五十八を十とり棄てたる御齡なれど、末になりたる心地したまひて、いともあはれに思さる。「汝が爺に」とも、諫めまほしう思しけむかし。

〔新編日本古典文学全集〕 柏木卷 三三三頁

「五十八を十とり棄てたる御齡なれど」という草子地から、『白氏文集』『自嘲』の「一節「静思堪喜亦堪嗟」を想起させ、そこから「汝が爺に」をどう解するかということで、「爺」はどれか、「似ること勿れ」の似るとは何を指すかについて議論さ

れている<sup>(8)</sup>。

本論では、「静かに思ひて嗟くに堪へたり」に焦点をあて、源氏はなぜ「喜ぶに堪へ」を略したのか、それが物語の展開においてどのような意義を持つのかを検討して、『白氏文集』の世界が『源氏物語』においてどのように機能し、語り手がいかにそれとは異なる世界を構築したのかを改めて考察したい。

## 一、場面説明

まず、源氏が朗詠した時に、それを聞くことができた周りにいる人物について見ていく。それを示すのが、次の箇所である。

御乳母たちは、やむごとなくめやすきかぎりあまたさぶらふ。  
(柏木卷 三三三頁)

薫の五十日の祝いの場面で登場する者は、女三の宮、薫以外には、「御乳母たち」とあるように、乳母と女房である。しかも「やむごとなくめやすきかぎり」として、身分の高いものばかりである。母親が、皇女、二品で准太上天皇の正妻であれば、選りすぐりの者たちであろう。ゆえに、高い教養があり、

「自嘲」の全文は一言たがわず頭に入っているはずである。

次に源氏視点で、女三の宮の密通の事実を知っているかどうかを見てみる。源氏は、密通の事実を知っている女房が邸にいることは、柏木の手紙によって密通を知った時点からわかっている。なぜなら、柏木が女三の宮と密通するには、手引きをする女房がいなければ成立しないからである。手紙をやりとりするのにも同様である。自分の藤壺や朧月夜との過去の経験から、そういう女房の存在が不可欠であることは十分認識している。小侍従がその仲介をしたが、源氏が明確にその人物を特定できたかどうかは物語の中では明らかにされていない。しかし、それにもかかわらず、ここでは次のとおり記されている。本の心を知らぬことなれば、とり散らし、何心もなきを、いと心苦しうまばゆきわざなりやと思す。

（柏木巻 三二二頁）

ただ今ながら、まなこゐののどかに、恥づかしきさまもやう離れて、かをりをかしき顔ざまなり。宮は、さしも思しわかず、人、はた、さらに知らぬことなれば、ただ一ところの御心の中にのみぞ、あはれ、はかなかりける人の契りかなと見たまふに、

（柏木巻 三三三頁）

朗詠前は、「本の心を知らぬことなれば」、「人、はた、さらに知らぬことなれば」と、密通の事実を知っている女房はいないと思っている。一方、朗詠後は女房たちの密通の事実の認識について、次のように異なる記述がされている。

この事の心知れる人、女房の中にもあらむかし、知らぬこそねたけれ、をこなりと見るらん、と安からず思せど、

（柏木巻 三三四頁）

当初は、密通の事実を知っている女房はいないと思つたにもかかわらず、朗詠後には「この事の心知れる人、女房の中にもあらむかし」と<sup>(9)</sup>、女房の中に密通の事実を知っている者がいることに思いが及んでいる<sup>(10)</sup>。さらに、「知らぬこそねたけれ」と続き、女房に密通の事実を自分は知らないと思われているという意識を持っている<sup>(11)</sup>。この場には小侍従のように源氏が知っていることまでわかっている者はいない<sup>(12)</sup>。

そうなると、この場面に登場する者は、密通の事実を知らない乳母・女房と、その事実を自分は知っているが、源氏はそうではないと思っている女房となり、源氏に密通の事実が発覚したとわかっているのは、唯一女三の宮だけとなる。女三の宮以外の者は、源氏が薫を自分の子であると信じており、この子の

誕生を喜んでいと思うことになる。

次に密通の事実についてそれぞれの意識の違いから、「静かに思ひて嗟くに堪へたり」はどのように受け止められたことになるのか、見ていきたい。

まず、何も知らずに、疑いもなく源氏の子だと思っている乳母たちは、年老いて生まれた子なので嘆いているが、でも喜んでいいるだろうとなる。一方、密通の事実を知っている女房は、「をこなりと見るらん」とあることから、薫が自分の子でないのにそうとも知らず、子の誕生を喜んでいいる愚か者と思っている。しかし、密通の事実を知っていても知らなくても、源氏が薫を我が子だと信じているという意識は同じである。そうであれば、「静かに思ひて嗟くに堪へたり」と源氏が口ずさむのを聞いたら、「喜ぶに堪へ」が抜けていることには気づくが、それで子の誕生を喜んでいないと思うことはない<sup>(13)</sup>。これが略されているのは、単純に中抜きをして朗詠しており、白楽天と同じような気持ちだと解するであろう。密通の事実を知っている女房が、これが抜けていることから、源氏は喜んでいないと不審に思つて、もしかすると、実は源氏も薫が自分の子でないことを知っているのではないかという意識に変わることにはな

らない。「召し出でて、仕うまつるべき心おきてなどのたまふ」(柏木巻 三三二頁)と記述されているように、その場にいる者には、源氏が薫を大切に思っていると映っている。そもそも、源氏は、表向きは全く疑いがもたれないように常に細心の注意を払つてきている。だからこそ「をこなり」となる。ゆえに、この省略によつて、源氏は喜んでいないということにはならず、白楽天と同じ心境となり、この部分の省略に何らかの意図を感じることはない。

しかし、女三の宮だけが、薫は柏木の子であることを源氏は気付いているとわかつているので、これを聞いたとたん白楽天とは異なり、柏木の子であることを思つて源氏は嘆いていると理解できる。ここから「喜ぶに堪へ」を略したことに意味があるのは女三の宮だけとなる。

以上の点から、「静かに思ひて嗟くに堪へたり」は、女三の宮に対して意識されたものであるということがいえる。それを踏まえて、なぜこの時点でそういう朗詠がなされたのかを探るために、ここに至るまでの源氏の女三の宮に対する意識を次章で見えていきたい。

## 二、源氏の女三の宮に対する意識（朗詠前）

薫を出産した当時、源氏は、人前では女三の宮を大事にしているように見せかけても、実際は愛情薄く、女三の宮が尼になりたいと訴えられると、「我ながらもえ思ひなほすまじう、うきことのうちまじりぬべきを」（柏木巻 三〇二頁）と、これからも気持ちを改めることはできず、もはや女三の宮に対して愛情を持つことはできないと思い、尼になるのもよいと思っていた。その一方で、「いといったう青み痩せて、あさまじうはかなげにてうち臥したまへる御さま、おほどきうつくしげなれば、いみじき過ちありとも、心弱くゆるしつべき御さまかなと見たてまつりたまふ」（柏木巻 三〇二頁）と、女三の宮の産後の病み上がりのような状態に「おほどきうつくしげ」と評して心惹かれ、「いみじき過ちありとも、心弱くゆるしつべき御さま」という思いも持っていた。この時点では、女三の宮に対して相反する思いが拮抗している。

しかし、女三の宮が出家をした後に五十日の祝いの日を迎える頃になると、源氏の女三の宮への愛情が深くなっている。

いでや、いとかひなくもはべるかな。例の御ありさまにてかく見なしたてまつらましかば、いかにうれしうはべらまし。心憂く思し棄てけること」と、涙ぐみて恨みきこえたまふ。日々に渡りたまひて、今しも、やむごとなく限りなきさまにもてなしきこえたまふ。（柏木巻 三二〇頁）

「日々に渡りたまひて」と、毎日女三の宮のところに姿を見せ、「やむごとなく限りなきさまにもてなしきこえたまふ」と、この上なく大切にしている。続いて、当日女三の宮と対面した時の様子が次のように描かれている。

几帳を引きやりてゐたまへば、いと恥づかしうて背きたまへる、いとど小さう細りたまひて、御髪は惜しみきこえて長うそぎたりければ、背後はことにけぢめも見えたまはぬほどなり。すぎすぎ見ゆる鈍色ども、黄がちなる今様色など着たまひて、まだありつかぬ御かたはら目、かくてしもうつくしき子どもの心地して、なまめかしうをかしげなり。（柏木巻 三二二頁）

「几帳を引きやりてゐたまへば」とあることから、女三の宮が几帳の中におり、源氏がそれを引き動かして中に入ったことになる。源氏の視線は、宮の後ろ姿から、髪、衣装、横顔に移

っている。その顔が、「うつくしき子どもの心地して、なまめかしいをかしげなり」と、尼姿であるが、かえってそれゆえに一層魅力を感じていることが記述されている。

続く源氏の思いが次の部分である。

「いで、あな心憂。墨染こそ、なほ、いとうたて目もくるる色なりけれ。かやうにても見たてまつることは絶ゆまじきぞかしと思ひ慰めはべれど、古りがたうわりなき心地する涙の人のわるさを、いと、かう、思ひ棄てられたてまつる身の咎に思ひなすも、さまざまに胸いたう口惜しくなむ。取り返すものにもがなや」と、うち嘆きたまひて、

「今はとて思し離れば、まことに御心と厭ひ棄てたまひけると、恥づかしう心憂くなむおぼゆべき。なほあはれと思せ」と聞こえたまへば、「かかるさまの人は、もののあはれも知らぬものと聞きしを、ましてもとより知らぬことにて、いかかは聞こゆべからむ」とのたまへば、「かひなのことや。思し知る方もあらむものを」とばかりのたまひさして、若君を見たてまつりたまふ。（柏木巻 三二二頁）

後ろ向きの女三の宮に対して源氏が話しかけている場面である。「思ひ棄てられたてまつる身の咎に思ひなすも、さまざま

に胸いたう口惜しくなむ。取り返すものにもがなや」と、女三の宮に心残りがしてあきらめがたく、今頃になって自分の身から出た錆として、昔に戻りたいと恨み言を言っている。さらに出家をした女三の宮に対して「なほあはれと思せ」と、密通発覚後冷たい態度をとって嫌味を言ってきたにもかかわらず、自分に心を寄せてほしいと虫のよいことを言っている。

このように、源氏が女三の宮に未練がましい態度をとることに對して、女三の宮は、「ましてもとより知らぬことにて、いかかは聞こゆべからむ」と、「あはれ」を知らないと言われたきたことを逆手にとつて切り返している。

それに対して源氏が「かひなのことや。思し知る方もあらむものを」と柏木が亡くなっているにもかかわらず、まだ柏木への嫉妬から嫌味を言うが、女三の宮は無言の状態である。

女三の宮からすげなくあしらわれ、自分の気持ちが伝わらず、「のたまひさして」と、言葉に詰まって会話は続かず、次に源氏のとつた行動は「若君を見たてまつりたまふ」である。この時、薫は乳母に抱かれて几帳の外にあり、源氏は几帳の外に出たのであろう。これは薫に心が移ってした行動ではなく、女三の宮へ言いたいことを言い切れず、思いが通じないこと

で、気持ちの行き場がなくなつて、仕方なしに薫に向つたとみるべきであろう。

以上の点から、源氏の女三の宮への意識が変容し、悔恨と愛執の情が認められるが、それに対して女三の宮は冷やかな反応しかせず、源氏はやむなく薫に視線を移したと読み取ることができる。

### 三、源氏の女三の宮に対する意識（朗詠後）

前章で論じた源氏の意識が朗詠後ではどのようなになっているのか、女三の宮の意識を絡めて以下のとおり見ていきたい。

人々すべり隠れたるほどに、宮の御もとに寄りたまひて、「この人をばいかが見たまふや。かかる人を棄てて、背きはてたまひぬべき世にやありける。あな心憂」とおどろかしきこえたまへば、顔うち赤めておはす。

「誰が世にか種はまきしと人間はばいか岩根の松はこたへむ

あはれなり」など忍びて聞こえたまふに、御答へもなうて、ひれ臥したまへり。ことわりと思せば、強ひても聞こ

えたまはず。いかに思すらむ、もの深うなどはおはせぬど、いかでかはただには、と推しはかりきこえたまふも、いと心苦しうなむ。

（柏木巻 三三四頁）

女房達がいなくなると、すぐに女三の宮のそばによって、「かかる人を棄てて、背きはてたまひぬべき世にやありける。あな心憂」と、薫を憐れんで、女三の宮に対して出家したことを責めている。「おどろかしきこえたまへば」となっていることから、これによって、女三の宮の注意を引いたことがわかる。ゆえに朗詠前に源氏が女三の宮に話しかけた後は、源氏は几帳の外で薫を抱いて顔を見て朗詠をしたが、その間女三の宮は几帳の中におり、二人は几帳で遮られていたと認められる。

一方の女三の宮は「顔うち赤めておはす」となっている。顔が赤くなつたということは、何らかの感情が表れたということ、朗詠前に「あはれも知らぬ」と言い放つた冷静さとは対照的である。これは、心理的に動揺している状態で、この時の女三の宮の動揺とは何かを押えて置く。「あはれも知らぬ」と言った直後に、「かひなのことや。思し知る方もあらむものを」と源氏から柏木のことをほめかされ、朗詠後は、「かかる人を棄てて」と、薫が柏木の子であることを前提として、薫を棄



てて出家したことを責めて薫を憐れんでいる。これらのことだけで動揺するとは考えにくい。この点について、深沢三千男氏が「こんなかわいい子を棄てて世を捨てた事の不当を指摘して、女三の宮をぎくりとさせ」と述べられているが<sup>(14)</sup>、密通発覚後は源氏からいろいろと嫌味を言われ、出家の際にも強く制せられた。よって源氏に言われた言葉は女三の宮にとつては想定内の言葉である。ゆえに、源氏の言葉には、朗詠に込めた思いをうけて、女三の宮にしか読み取ることができない意味が含まれていると見るべきであろう。

源氏は朗詠前も後も、女三の宮に対して柏木のことを匂わせつつ、出家したことを嘆いている。朗詠前に女三の宮へ自分の思いを訴えても冷たくされた結果、朗詠後は自分ではなく薫を紹介して「あはれ」を訴え、出家したことを非難している。源氏は女三の宮に棄てられた薫に自分を重ね、自分に対する「あはれと思せ」と薫に対する「あはれなり」が呼応しているといえよう。

朗詠前においては、源氏は、自分は辛い思いをしており、何とか女三の宮の気持ちを自分につないでおきたいと意識したが、その気持ちは通じなかった。自分がためなら、今度は薫で

訴えたいというわけである。

これらの点から朗詠前から朗詠後にいたるまで、意識は常に女三の宮に向けられていたことがうかがえる。その意識とは、自分が女三の宮を出家することに追い込んだことを後悔し、これからも情をかけてほしい、愛情を持つてほしいということである。

この朗詠前と後の意識をつないでいるのが「静かに思ひて嗟くに堪へたり」の部分であるので、それについて次章で見えてきたい。

#### 四、源氏の朗詠に込めた思い

女三の宮から薫に視線を移した源氏は、薫を抱いて顔を凝視している。そこに「いとおぼえたりかし」（柏木巻 三二三頁）と、柏木の面影を見いだし、「あはれ、はかなかりける人の契りかなと見たまふに、おほかたの世の定めなさも思しつづけられて」（柏木巻 三三三頁）と、柏木の運命を思い、世の無常を感じている。この時は女三の宮は几帳の中にいるため、源氏から姿は見えていない。しかし、この時点でも女三の

宮に意識が引つ張られているため、几帳を隔てた女三の宮に源氏の思いを伝えるには、朗詠しかないであろう。それが、「静かに思ひて嗟くに堪へたり」である。この朗詠は自分を突つばねた女三の宮に対して、唯一源氏が思いを伝える方法だった。

そうすると、女三の宮だけが理解できる源氏の思い「柏木の子であることを思つて私は嘆いている」ということになる<sup>(15)</sup>。この嘆きには、様々な思いが込められているといえよう。不義の子の父として残り少ない人生を生きていかなければならない。柏木の子であるのに自分の子として育てていかなければならない。薫の成長を見届けることはできない。もしかすれば薫は不義の子という真実をいつか知るかもしれない。その上、事情を知っている女房は自分のことを笑っているのを死ぬまで耐えていかなければいけない。

白楽天が抱いた老いて生まれた子ゆえの嘆きとは異なり、不義の子ゆえに薫に対してはもとより、女房に対してまで苦い思いをしなければならぬ。しかも誰にも言えず、この気持ちを秘めていることを理解できるのは女三の宮だけである。それにもかかわらず、女三の宮から見放されたらどう生きていけばよいのかという思いがよぎった可能性もある。こんなに自分は辛

い思いをしており、柏木の子であることを思つて嘆息するだけではないということを、女三の宮に訴えているのであろう。

その流れでみると、朗詠後に源氏が女三の宮に言った「かか人」は、単に「かわいい子」というだけでなく「柏木に似ている子」という意味が含まれていることになり、その前の「この人をばいかが見たまふや」というのは、女三の宮に対して、まずは「柏木に似ているでしょう。」という問いかけになる。この前に「宮は、さしも思しわかず」（柏木巻 三三三頁）と、柏木に似ていることの見分けがつかないと記載されているが、これは地の文である。語り手は女三の宮が柏木の顔をはつきりとは覚えていないことがわかっているが、源氏は二人が思いを通じ合っており、女三の宮は柏木の顔を覚えており、見分けがつくと思ひ込んでいる。五十日の祝いに薫を見ようもしない態度に、薫を抱いて女三の宮に近づき、「この人をばいかが見たまふや」というのは、「柏木に似てほしくないと思つているのに、似ているでしょう、どうですか。」ということで、密通の結果を見せつけられた形となり、しかも、源氏が、柏木の子であるにもかかわらず、表向きは自分の子として抱いているという状況から、源氏の置かれている立場や苦悩を感じたであろ

う。ゆえにこそ女三の宮は「顔うち赤めておはす」となつて、冷静さを保つことはできなくなつた。しかし源氏には女三の宮の顔は見えていない。

そこで、さらに畳みかけるように、「誰が世にか種はまきしと人間はばいか岩根の松はこたへむ」と歌を詠じている。「種」は柏木を示唆して、「種はまきし」と、密通を露わに口にして、さらに「あはれなり」と、薫が不義の子であることを暗に仄めかして母親に見捨てられた不憫さを言うのと、女三の宮は堪えられなくなつてひれ臥してしまふ。大坂富美子氏が「源氏が「誰が世にかたねはまきしと人間はばいか岩根の松はこたへん」と迫つた時、女三宮は「ひれ臥し」て薫の出生の秘密を終生黙して語らぬという意志を示していた。(略)か弱い者の拒否と自分を守ろうとの姿勢を示す場で使われている」とされているが<sup>(16)</sup>、「ひれ臥」すことで、拒否と自分を守るといふのは確かにそうであるが、「薫の出生の秘密を終生黙して語らぬという意志」まで読み取ることとは無理があらう。女三の宮は、自分以外に密通の事実を知っている女房がいることは自覚しており、小侍従のような自分本位の女房の存在もわかっている。自分が黙つても誰かが漏らしてしまうリスクはある。そも

そもこの歌の後で「あはれなり」とあるので、これは薫に対してである。そうなると、歌の主体は薫になる。薫が女三の宮に父は誰かと問うようなことがあれば、答に窮するであらう。ゆえに、「出生の秘密を終生黙して語らぬという意志」どころか、いたたまれなくなつて臥したととるべきである。

以上のことから、朗詠が女三の宮に向けてなされたものと解すること、源氏の朗詠前の女三の宮への思いが、朗詠によつて中断されることなく朗詠後の女三の宮への語りかけにつながつた。ここに、辛い自分の本心をわかつてほしいという胸中に秘められた言外の意味を読み取ることができ、朗詠に続く女三の宮への会話文に込められた真意をくみ取ることができた。

## 結　　び

以上、「静かに思ひて嗟くに堪へたり」という源氏の朗詠に着目して、この解釈を検討してきた。

従来の研究史では、薫に対する源氏の胸中心理として捉えてきたが、「喜ぶに堪へ」を略して朗詠したことについて、それを聞いたものがどのように受け止めるかということを源氏の視

点から解明し、朗詠前と後における源氏の女三の宮への意識を紐解いてみた。その結果、この朗詠は女三の宮に向けてのもので、源氏が女三の宮への未練から、複雑に交錯する嘆きを訴えたことが判明した。

そこから、朗詠が単なる『白氏文集』の朗詠にとどまらず、女三の宮だけに伝わる源氏からのメッセーj性を有することとなり、その後が続く会話の内容に結びつくものとなった。

朗詠という手法を用いることで、『白氏文集』の世界が『源氏物語』において単なる引用以上に機能し、源氏の韜晦された心情をあぶり出し、原詩とは異なる物語の深い世界を構築したと考えられる。

## 〔注〕

(1) 原詩は次のとおりである。〔『白氏文集』巻第五十八〕白文は那波本を参照。

自嘲

五十八翁方有後

五十八翁方に後有り

靜思堪喜亦堪嗟

靜かに思へば喜ぶに堪へ亦嗟くに堪へたり

一珠甚小還慙蚌	一珠甚だ小にして還た蚌に慙ぢ
八子雖多不羨鴉	八子多しと雖も鴉を羨まず
秋月晚生丹桂實	秋月晚くに生ず丹桂の実
春風新長紫蘭芽	春風新たに長ず紫蘭の芽
持盃祝願無他語	杯を持ちて祝願するに他の語無し
慎勿頑愚似汝爺	慎んで頑愚汝が爺に似ること勿れ

(2) 注釈書は次のとおりである。

・よろこぶにたへたりといふをば略して、なげくにたへたりと云へるは、源氏の御心にかをるの生れ給へるを、なげかしくのみおぼす故也。〔湖月抄〕師説

・「喜二堪へ」の語を除いたのは源氏の胸中にふさわしくないからであらう。

〔新編日本古典文学全集〕柏木巻 五七七頁

・静思して嘆きをこらえている。柏木の子であることを思つて嘆息する、の意を秘める。傍らにいてこれを聞く人は前の「あはれ、残り少なき世に…」を受けて、晩年の子であることを源氏が嗟嘆するのかと思う。

しかし、次のように単に略されているだけであると解し

〔新日本古典文学大系〕柏木巻 三〇頁

ているものもある。

・落ちついて考えて見ると、子供の誕生は、喜ぶに十分であり、(柏木の子であるから) 又嘆くにも十分であった。

(『日本古典文学大系』 柏木巻 三九頁)

- (3) 松田成穂氏「柏木巻に関する一・二の問題」——なんちがちに——『平安朝文芸論——源氏物語を中心に』(笠間書院) 二〇〇一年六月(初出『金城国文』第四十一号一九六八年八月)

- (4) 深沢三千男氏「五十日の祝」『講座 源氏物語の世界』〈第七集〉(有斐閣) 一九八二年五月

- (5) 前掲松田成穂氏、深沢三千男氏論文以外のものとして、山本淳子氏「光源氏の「自嘲」——『源氏物語』 柏木巻の白詩引用——」『中古文学』第九十二号 二〇一三年十一月もある。

- (6) 池田龜鑑氏は、「汝が父に」の頭注で、「汝の父柏木に似ないやうにと源氏は薫に注意を與へたいお氣持だつたらう」(『日本古典全書』二五一頁) とされているが、原詩に引きずられており、そういう氣持だけであればわざわざ朗詠する必要はないであろう。

- (7) 『源氏物語』では、「うち」誦ず・誦す」の用例は五十

二例である(『ジャパンノリッジ』および『源氏物語大成』を参照)。そのうち漢詩を引用したものは十五例となっている。引用例はすべて原文の一部を抜粋しているが、次の一例は、「就中腸断是秋天」(『白氏文集』卷第十四「暮立」)の「是」を略している。語調を整える助辞であるため文意に影響はない。ゆえに本用例は意図的に略した特殊用法と考えたい。

- 「中に就いて腸断ゆるは秋の天」といふことを、いと忍びやかに誦じつゝゐたまへり。(蜻蛉巻 一六八九頁)
- (8) 本朗詠は源氏が薫を抱いて、顔を見つめながらなされている。この朗詠前には薫の顔が誰に似ているかということについての源氏の心内文が続くため、朗詠そのものの議論はあまりなされず、「汝が爺に」の部分に関心が向かうのである。

- (9) 「心知り」の「心」は「事情 内情」と訳されているが、人に知られては困る秘密の事柄である。この後に「心知らざらむ人」(柏木巻 三三四頁)という表現が出てくるが、いずれも柏木と女三の宮との密事を指し、源氏の心内文で

ある。薫の顔が柏木に似ていることに源氏が初めて気づき、隠してきたことが人に知られることを改めて意識したからであろう。

(10) 密通の事実を知っている女房はいないということ、いるということは、一見相矛盾している。源氏が朗詠後に改めてその存在に気付くというのも無理がある。これは「乳母たち」には、薫の乳母たちと女三の宮の乳母たちの二種類があるからである。つまり、薫付きの女房は密通後に人選されたため密通に関与した者はいないが、女三の宮付きの女房は関与した者がいるということである。五十日の祝いには薫の乳母たちが儀式の準備・進行にあたるが、この場には女三の宮も同席しているため、宮付きの女房もいる。朗詠前は源氏の目に映るのは薫の乳母たちだけであったが、「人々すべり隠れたるほどに、宮の御もとに寄りたまひて」（柏木巻 三三四頁）の「人々」の中には、女三の宮付きの女房もいる。そうすると「この事の心知れる人」というのは、女三の宮付きの女房である。この場にいる女房の中に、密通を知っている者と知らない者が混在していると見たい。

(11) 「知らぬこそねたけれ」については、源氏が自分の気持ちをおぼえてもらえないのは悔しいという注釈（『新編全集』）と、密通の事実を知っている者が誰かわからないのは無念だ（『大系』、『玉上評釈』）と二通りの解釈がある（『新大系』は両方）。後者の解釈でも、源氏が密通を知らないと思う女房の意識には影響がない。

(12) 源氏は、小侍従が仲介した柏木の手紙を自分が持っていることで、その女房には自分が知っていると思われているという意識を持っているはずである。この女房は、小侍従であるとうすうす感づいている可能性は否定できない。源氏としては、柏木の顔をよく知っていそうな女房を薫に近づけたくないので、小侍従は「乳主」としてもこの場にはいないといえよう。

(13) 玉上琢彌氏は「原詩を知る者はこの子の誕生を源氏は喜んでいない、と知るではないか。それとも、そうではなくて、「あはれ、残りすくなき世に、おひ出づべき人にこそ」の言葉を思つて終わるのであろうか」（『源氏物語評釈』第八巻 一一七頁）とされている。しかし、「源氏は喜んでいない、と知る」ためには、原詩だけでなく、源氏に不義

の子だと露見してしまったことも知っていることが必要である。

(14) 前掲深沢三千男氏論文。

(15) 続く草子地の「汝が爺に」とは、女三の宮を意識したもののゆえ、「似るな」とは、柏木の顔に似るなど訴えていることになる。この解釈については諸説存在し、さらなる意味も含まれているかどうかについては、別稿に譲りたい。

(16) 大坂富美子氏「女三宮の成長―母性を契機として―」

『中古文学論攷』第十五号（早稲田大学大学院中古文学研究会）一九九四年十二月